

はじめに

あなたはなぜここにいるのですか。人は誰もが〈いまここ〉に生きているわけですが、自分はなぜこの世に、この国に、この場所にいるのかと考えると、不思議な気持ちになってきませんか。そこにはさまざまな事情があり、何かの因縁やなりゆきがあり、将来の夢や目標に寄せる秘めた情熱もあるでしょう。

自分はなぜ、この大学のこの教室にいて、ここで何を学ぶのか。あなたはこの問いに、どう答えますか。受験勉強でお世話になった問題集のように、巻末に答えが1つ用意されているわけではありません。問われているのはあなた自身であり、だから自分で考えて答えるしかありません。その答えはあなたの考え方しだいでも変わります。それをどう表現するかもあなたしだいです。とはいえ他人と違う答えをわざわざこしらえる必要はありません。自分でじっくり考えた答えなら、それがただちに自分を^{オリジン}原点とするオリジナルな自己表現となります。個性はここにおのずと現れます。

そして現実世界はこの種の問いであふれています。人生の困難な課題に対しても、社会の複雑な問題に対しても、あらかじめ決まった答えがないところで、あれこれ考えぬいて最善を尽くし、最適の解決策を探っていくほかにないのです。この現実世界であなたはどのように生きていきますか。国際化の進む現代社会の一市民として、あなたは大学で何を学んで

おきたいですか。ここで学問して身につけた力を生かして活躍するために、どういう準備をしておいたらよいでしょう。自分の生きていく道筋^{キャリア}を考えて、これから進むべき方角を見定めましょう。

「キャリア」は通常、「職業」や「職歴」、特別高度の「専門職」として理解されています。しかし元来はもっと広く、すべての人の「生涯の経歴」や「一生の行路」を意味します（大辞典で“career”を引いてみましょう）。しかも生きることは学ぶことです。大学で学問する4年間は、一度きりの人生キャリアのなかでも重大な転機です。知識つめこみ型で受け身の勉強から、自分の意欲と問題意識に根ざした主体的な学術研究へ！これまでの自分の学びを総括し、真に自立した一個の人間となるのです。自己の学びの基本姿勢を〈いまここ〉で180°転換することで、あなたのこれからの人生の質も根本的に変容するはずです。『学問キャリアの作り方』という本書表題には、そういう熱い期待がこもっています。

もしもあなたが入学直後なら、いまが大学での学びをデザインしてみるチャンスです（これから始まるキャンパス・ライフを、さまざまに思い描いてみましょう。いままで頑張ってきて今後も続けたいこと、これから新たに始めたいこと、大学時代に一番やりたいことをメモに書き出してみましょう）。大学では物事を深く見つめて考える力を身につけます。高校までに習得した基礎知識を総動員し、壮大な学問世界に分け入って、自分の問題関心に応じて学科やコースで特定分野を専攻し、みずから本格的に深く掘り下げて学問するのです。

なかでも一番重要なのは、学生生活の集大成たる卒業研究です。卒業論文は誰が書くのでしょうか。あなた自身です。テーマは誰が決める

のでしょうか。これもあなた自身です。ここでは結論となる答えだけでなく、問いそのものも自分で立てるのです。大変ですね。不安ですか、それとも楽しみですか。

学問する人は誰かに教わり習うだけでなく、みずから学んで問い、問うて学ぶことをくりかえす。事柄を適切に問う方法を学び取るなかで、将来直面するだろう現実の問題を深く考える力を養っていく。卒業までにそういう〈学問力〉を身につけた自分に成長し、**広く高く深い教養**をみずから一生涯獲得していく「伸びしろ」をもった人間になれるように、まずは勇気を奮って一步を踏み出しましょう。本書はそれを心から応援しています。

こうして本書は大学4年間だけでなく、その後をみすえた初年次教育のテキストでありたいと、欲張りな希望をいただいています。しかも従来のテキストが、読み、書き、プレゼンといった個人の学習スキルの涵養を主な目的としていたのに対して、本書は、知の生産それ自体が協同の営為であることを強調し、他者と関わり、他者と共に新しい知を創出することのできる人材育成・人間形成を目指しています。アカデミック・スキルのみならず、ソーシャル・スキルをも涵養することを目的として、本書は、討論や質疑応答、建設的に批判し合うことの重要性や、その方法をていねいに解説しています。ディスカッションやグループワークをつうじて**協同で主体的に学ぶこと**の重要性を謳う本書は、今日の大学教育の現場に適したテキストだと確信しています。

客観的な根拠と良心にしたがい、自分で考えて答えを出し、責任をもって発信し、他者と良好に関われる、学術的な教養にあふれた次世代リーダーへの成長。これを大いなる目標として、第I部は文理の別なく

全学問に共通の基本姿勢と留意点を、1学期間のゼミをつうじて順序良く、ひととおり学べるように編集してあります。みずから批判的に考え、みんなで話し合い、協同で学ぶ研究仲間の一員として、自分の問いを立てて、既存のデータを「調べる」、文献や図表を「読む」。みずからの仮説を検証し、十分な根拠を得たうえで、全体構成を練ってレポートを「書く」。そして研究成果を効果的に「発信する」。この一連の学問力を、各章の【演習】の実践をとおして鍛えましょう。

そして第Ⅱ部には、学問力をさらに高める技法として、インターネットの活用法や、統計データの分析法、そして協同討議の諸技法等、やはり文系・理系の区別なしに、実社会でも頻繁に利用されているものを、簡潔に解説しています。どうぞ適宜適時に参照し、活用してください。

初年次ゼミだけでなく、大学の授業や研究室や自主ゼミでの発表・討論はみな、みずから学問する仲間たちと、切磋琢磨して互いを高め合う、とても貴重な成長体験の現場です。この大きな学びの手ごたえを見失いかけた高学年次の諸君。そしてまた企業や地域や家庭等、人間社会に山積する問題と日々格闘するなかで、数年前の学生時代の学びの意味を再認識したいあなたにも、ぜひとも本書を手にとっていただければ幸いです。そしてこれからのわれわれの現実世界が、人間の豊かな学びの継続と連繋により、すこしでもよりよいものになることを切に希望しています。

本書の使い方

大学では、自分で考え、自分で知を生み出すことが求められています（第1章「大学で学ぶということ」）。自分で知を生み出すにあたり必要とされるのは、疑問を持ち、自分で調べ、分析し、答えるスキルです（第2章「学術研究とは」）。研究をはじめするためには、研究対象であるこの世界に関心を持つと同時に、基本的な知識を習得しておく必要があります。まずは、専門分野にとらわれず、色々な分野の講義に出席して、さまざまな知の世界を体験してください。ただし、大学の講義は、授業に出て教科書や参考書を読み、知識を記憶するというものではありません。講義ノートの取り方を工夫したり、教員に積極的に質問したりして理解を深め、自分なりに問題意識を深めていきましょう。また、知識の源泉は、授業だけではありません。図書館におもむき、関心のある本や論文を読みましょう（第3章「文献を探す」）。その際、本や論文の内容をしっかりと理解しつつも、「本当かな？」と疑問に思う気持ちを常に持っていてください（第4章「読む」）。

大学での学びは、ここでは終わりません。大学生になったみなさんには、「発信者」となることが求められています。みなさんが一人の自立した人間としてメッセージを発するためには、それなりの根拠が必要です。インターネットや文献、統計資料を調べたり、アンケートを行ったりして、データを集めましょう（第4章「読む」、第9章「インター

ネットで調べる)。さらに、集めた統計データを適切な方法で分析し、結論を導くスキルを身に付け、説得的に意見を発信する力をつけましょう（第8章「統計データを収集する・分析する」）。

根拠のある力強いメッセージは、社会にむけて発信されるべきです。執筆の作法やルールに則りながら、レポートや論文をまとめるスキル（第5章「書く」）や、口頭で聴衆に向けて発表するスキルを身に付けましょう（第6章「伝える」）。また、他の人とのコミュニケーションを通じて、社会にさまざまな考え方があることを知り、自らの殻を破り、他者と協力することも、より高いレベルの知を目指すうえで、不可欠です（第7章「みんなで考える・学び合う」）。

本書は、大学以降の学びに必要なスキルを簡潔に紹介しています。とはいえ、本書を読めば学術研究に必要なスキルや態度が身に付くというわけにはいきません。本を読んだ後は、頭と体をどんどん動かして、大学での学びを実践してみてください。研究が行き詰まってしまったとき、レポートの書き方が分からなくなってしまったとき、グループワークがうまく行かないとき、本書を再び開いて、前に進むヒントを得ていただければと思います。

目次

はじめに	<i>i</i>
本書の使い方	<i>v</i>
第 I 部 自立編	1
第 1 章 大学で学ぶということ	2
1.1 大学ってどんなところ？	2
1.2 大学での学びとは？	5
1.3 「自ら」の重み	8
1.4 批判的思考	10
1.4.1 批判的思考とは何か	10
1.4.2 コミュニケーションが批判的思考を育てる	11
第 2 章 学術研究とは	13
2.1 学術研究とは	13
2.2 学術研究のプロセス	15
第 3 章 文献を探す	20
3.1 なぜ既存文献を読まねばならないのか	21

3.2	情報の鮮度	22
3.3	学術文献の形態と性質	23
3.4	学術書籍の構造	25
3.5	学術文献の探し方	27
3.5.1	図書館を利用する	27
3.5.2	データベースで学術文献を探す	30
第4章	読む	31
4.1	文献の批判的読解	32
4.2	文章の要約	34
4.3	図表の批判的読解	39
第5章	書く	43
5.1	レポート・論文とは何か	43
5.1.1	レポートと感想文の違い	44
5.1.2	レポートの構成	45
5.2	引用の仕方	48
5.2.1	引用の基本的なルール	48
5.2.2	学術論文を眺めてみよう	50
5.3	参考文献一覧	54
5.4	図表の使い方	57
5.4.1	表を作成するときの注意点	57
5.4.2	図を作成するときの注意点	58
5.4.3	共通の注意点	59

5.5	わかりやすい日本語を書く	60
第6章	伝える	67
6.1	発表準備から発表まで	68
6.2	スライドを作成する際の注意点	70
6.3	よいプレゼンテーションとは	72
6.4	質問・コメントの重要性	73
第II部	鍛錬編	75
第7章	みんなで考える・学び合う	76
7.1	ワークショップ	77
7.1.1	ワークショップとは?	77
7.1.2	ワークショップの運営	78
7.1.3	アイスブレイク	81
7.1.4	ブレイン・ストーミング	83
7.2	ディベート	88
第8章	統計データを収集する・分析する	99
8.1	母集団と標本	100
8.2	各種統計データを活用する	103
8.3	データの尺度を見極める	105
8.4	中心の指標～平均値と中央値	107

8.5	ばらつきの指標～標準偏差	109
8.6	データを可視化する	111
8.6.1	棒グラフ	111
8.6.2	円グラフ・帯グラフ	113
8.6.3	折れ線グラフ	114
8.7	データの関連性を調べる	116
8.7.1	量的データの関連性～散布図と相関係数	116
8.7.2	質的データの関連性～分割表	118
第9章	インターネットで調べる	120
9.1	検索エンジンを活用する	121
9.2	Wikipedia の利用について	127
付録 A	スケジュール管理のすすめ	129
付録 B	メールの作法	132
執筆者紹介		137